

30 1 2 3

20 1 2 3

10 1 2 3

9 1 2 3

8 1 2 3

7 1 2 3

6 1 2 3

5 1 2 3

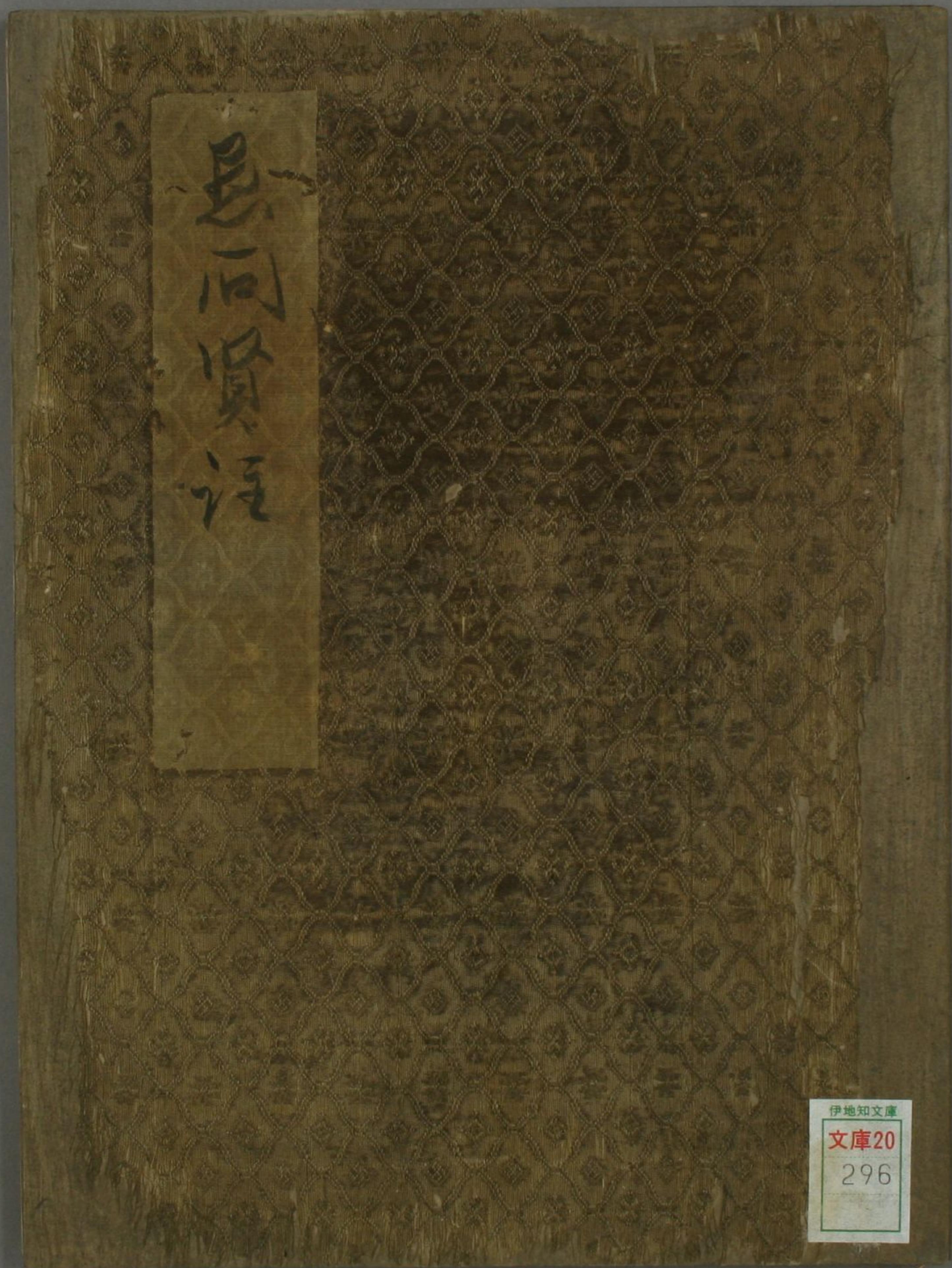
4 1 2 3

3 1 2 3

2 1 2 3

1 1 2 3

伊地知文庫
文庫20
296



わゆる道人づかる事とひふてまくは世本
て詠せらるる例て前を以て歌者之をうとるも
よも桂林乃一枝と舉りてまよめ族をあり
やつ色をうりて寛じれ序玉とし松とす翁年
角としけあも鳥目とすく古賢れ趣向妙す活字
風雅の遺音束とあり。蓋領玉すく七句有余
乃遊宴と保てて二十二字九奥有と寺くよりノ
柿本の言葉とぞとしてあくと山邊の毛道
三月三日乃ぞれ花陰に侵遊とぞ春色
とぞいともねしの月下は今尚た
うとうとし造次とします頼津み
遁とぬけ寧らうとあくとぞうと
よむとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
運とすり清遠と宴と用時を金石乃更と
釜海と存とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
翁とすけ下とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
瞬と相聲とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
同體の餘教ナ爲因とほと玄とれ道玄と會せし
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと

一
わざわざと見ゆる事の多くは、其の
右せりと左せり二儀おほづくて、義もいわう
情中うつてたまひあけづらひ花のうの寫
あすじ桂れども風くすぎ詠あすじ風
や、性と外説すかほくを別の事あつ
て、萬葉集下精柏うりと風雲草すかく對
眼前の風景とあとのまゝ説すかくとつゝ發
明れ、萬葉集下古語とつゝ高曲と
きく萬葉が軌範とするものとしむ
下を實らうとこゑのれわに真實
ゆき風情とくわすかふ説
麿と和音の道因詩、らむわらむむ話
ゆく所といつゝ苦歎うふくらむと蘇音
詠うすくらむとくらむ年れ年足乃踏而とま
すむし色うまいあらゆる所と細めうきくゆ
中うくはとくはせうもくらす風情のゆ
あうとくはとくはせうもくらす風情のゆ
すまうとくはとくはせうもくらす風情のゆ
とうとくはとくはせうもくらす風情のゆ
鬼神と風としよと文美としきり風
情と風としよと文美としきり風

三代集の艶言をひくもひて俗言俗態とす
色づけられ又亨了活世の音めり前世の音むりも
聖代の風氣とすかんす吟賞す(きう)や
三代集を明時の正雅とも軽佻とするも
詩三百首を本朝乃童謡(よしよし)其國の善惡と
風流改(か)へり日本記童謡(よしよし)書奇とすか
せ乃活亂といふうりやあらう三十一字れ詠を素
矣爲尊者重臣の詠りをしてあら詠くにせ
りもうち其詞つまやか其首ひう(古義のう)
ものうもあとゆざる軽(ひき)いを今うひ

予とぞりとぞ希(ひ)め感(うなづ)くと森(もり)あさひのうう
艶言とのううて政(まさ)と云(い)ふとすれま
すめ色(いろ)れほりぬとくに賢(けん)思(おも)ひくんせの奥
廢(はい)とくすううも正雅(せうが)の趣(おもて)とうて多用(たうよう)の術
とくすううとくの詞(ことば)と功(こう)磨(まろ)と
也(よ)とくやまくとくにあら義(ぎ)法(ほう)基(き)本(ほん)せすとく
じあらぬとくとくとす色(いろ)と

奇(ひ)とぞよとくとくとくとす色(いろ)と
やせかわほとくとくとくとくとす色(いろ)

秋樟吟樹上巻
奇のつゝ善更宋と
争るす大道すもとて仁義へろ和等
乃軒ひとくもひとれ道の清亮也にて
もしして謂ふたりす但大輶を推轎の
貨ひす和等にりふねり仁義十軒けん
まうそは秋樟村の所りと學舎とつる
きるそ色見うづきや勅勒を萬葉
もとけもあり奇念を宣平ノヒトナリふて
道乃好也ともいめ三川勝劣と争ひ加え
須臾或え未仁乃詔勅をか孫娘ミコを
一章の内詩を付づく事多々代多くし候
ひりあしまむらきくわ詩く漢魏盛唐各一
軒別さりとすとすと葉三代集以後序と并集
めうしきの農賄よりりうひき内ねあつて
一代吟賞せまつてやるのうづうの所と西乃
と模寫するもかわ

萬物之欲之也曰
圓以全之曰圓

う俗どすうて詩人才子文節と代り
ソシテ秋園と天神地祇の詩集圖ノ冒
統とえ室北道とゆりあくまう乃所と
立身するあり。但今に付くよそのあゆり
立つゆ色とせきうち。やうしてあるも
了其首委古來風軒移とて今乃す。され
れゆと西行とて二換かの清秀とてよりそ
宣平延喜のじは道中興とてらる古今集
行貫之ひは十時せうとや野獲三百六十
首と核て古今歌三百八十首とつぞて今解核
ちえを也といをりゆて其後一代とある
本核と用ひてつゝの集とてはとてわ
えて可多歌紀氏野核三匁金玉三十人余
合九品等前後十又七種とて
後類別に而赤秀寺吉核八首中納鑑
右相府よに近近未秀歌再核井文よ行進
古寺後赤院秀歌大軒大と常す行進
沈寂ひと古風より詞とえ達よけ難
不詳とひくも行肝要す也
一切のいづらきとて詞とねよす。土もどり

一詞と志あざは姿のれす姿もむづくと黒
風景行は伊も又内とからり并とらむとすと胸中
の風情とくわきとほ殿の主丈す金子す
开きとらむとすとさき詞とらむとすとさ
古來先と達りとよてひうやう金出ね
まうじとしよまうにかとめとととと
一詞とくらむとくわきとめとととと
ともりの而許不す有前事也薩衛文
賦序恒思意不稱物又不還意蓋兆知
難能え難也とつう立と又内とつう
風情と得あしてく風情とうと胸と
とくわきとけん人とのまと不詠風情と
やくわきと難うとけんとけんと
心前とふえく得とせわ事あくと
三とあすわくちとふえも事とありく
りして一首とまんと背古にはけんと
古跡とすを教す初入更誰由絶退何時と
うす何事あく全言う者歟
一章とと家とすとひて初のノ題

流傳するものとえども、いざりて
かくの事は、いかにもあせりて、
傍らへて、懇意に、題うます。三才集と
さして、字を、何より、とて、辭が、こと、いき
のとも、わざわざ、とて、大様の、やう、ひげは
いや、字す、かど、赤練、を、ほほへ
詮、その、古事記、と、瞽古、すら、あつま
やんより、かと、字號、まとらん、も、すく、
ひ廣字と、字とす、まくわ

秀吉の血をあらわす

一界本就九十九
院の山系等乃て多
長寄りの如きを三十一字八節とす
今

奇の半興ふる風せこの所とまくとしままむ
けられすもあらそひ集ひしらうらのあら
とひらて今乃代れ輒畢とすき九品十駄のと
かわらとし色とひしのせすれまゆり
上古に多長歌とゆどんづらゆと國す事
原其意切さすよりてサ一字すとつまれ
もまつと詠て中古すと東三條殿拾遺長
歌後頼朝之手載もまつひりまさかの歌を
すわざまづかくしてせじもまづはまなす
人の歌をれおうすく少くも古今まつの中
悲かね用ひかじるはいはいすとまつて
れはすうの意せばあれまうの地と文と核と
ほくろくわあせつのりとさとめうす
とはまといけよすとあやすまうの
地とひてゆすとよびけよだち。
うととしに歌とよはれかずてよもよ
されと一ゆめめくと地とひくとひくと
ちとすとよとよとよとよとよとよとよと
てゆととよとよとよとよとよとよとよと
かわ文とすりとすりとよとよとよとよ

一定の事で此れあらわすは情の事と云ふと別
てはいふがひやくやうのやうやうに全へける
べくすなむりとて色をかうのゆうは
けよと一音れどもとふ音とよす
えゆゆき。但教首ひよとつは
御まこととて經圓をよましと情の信託と
若別の事とよ

は晴亨と枝にいの則秀歌本所と曰ふ
別れすとあはれにす也一百首一とよ古
各別のうきよあれ五ねりひよりをこ

とのうちの肺をぬまつりとて
經圓と情亨と別率と云ひてめす
萬目よいねりとては泣恩一とての詞と
免誦するもとてをとてをとてをとてをとてを
せまくせんせんせん別うと云ひてめす
はは白河を七百首と云入道印詠卿
冷泉大師と云ふとてすとてをとてをとてを
とてをとてを

一本歌ともあらざのとてすとてをとてをと
古賢とてすとてをとてをとてをとてをとてをと

乃平あくまことて向とおもかを視てつと
ある事あらわりあめのくわゆる
室家源よりゆき行けしとようから
平穂とも本うへどう色きやまと下す
寺の向と二をとむてのとある又惠那とい
まくまく高麗ともう手とよし所とす
すす紫青うらのと下向とよりうもすき
教り月ひもすと下向とよりうもすき
下向とよりうもすと秀秀ア床わくとよりうもす
やみの紫れ向りと下向とよりうもす
りけふとよりうもすとよりうとお家源元乃
けりと西朝うへてによりうもすと向りとよりう
とよりうとよりうとよりうと秀逸のとく
けりとよりうとよりうとよりうと秀逸のとく
しもとよりうとよりうとよりうとよりうと
よりうとよりうとよりうとよりうとよりう
すとよりうとよりうとよりうとよりうとよりう
平穂ともかあら葉のと古今あらそ
ひまくしてきまくとよりうとよりうとよりう
とよりうとよりうとよりうとよりうとよりう

一弓の弓を本物の弓とおもひ
うそとおもひ

醍醐太政大臣

ひきのわざとおもひ

不歌

のそとおもひ
一弓をねつてねねとおもひ
ひきのわざとおもひ

家臣卿

ひきのわざとおもひ
一弓をねつてねねとおもひ
ひきのわざとおもひ
ひきのわざとおもひ
ひきのわざとおもひ

定家

ひきのわざとおもひ

本歌

てりせとくらむとくらまのたまひつう月日をく
さかわたりて雪ひるをすひあせ

一そく内とどりてうとうちのたまひくす

五十六

佐成卿

じゆかとは我いとあひてもがくに連
花れどりとよけよてとばれとばれ
詞り事へるまや花ひらうほく
すりきのせしことくとよまくと
まくまく おまき門桂とあ

そけもあはれ、あり

一わゆる詞とすとあはれとまゆ照
うくげとよくとよくとととととととと
ととととととととととととととととと
葉二代集めとまきとまきとまきと
わゆる詞とすとあはれとあはれと
かくもや順流院に製ひしものとすと
と高橋の禪門にすと建保の山寺を

きよしのむねにあらと安隆卿はうけよ
うそのすばとうそをうかうとひかわ
雪うすく甚定朝にすてらすれ風うる
成けつめしらうるまのり入道寺と
秋月うとひのうゆゑわ勅祇ち房
れ玉にうめがひめあさせらうじ堂ふ
ひうのうううううううううううう
とくうううううううううううううう
やうせんじれうかうううううう
一歌一向のうううううううううう
河を代りときの御令傳成

宣家ち家ちの祐宮方亨と判りうひ河肇
せよとえ一向かくゆるもととくわうてうく用つて行
ち祝のうかみと南院の判とび河とはなと
うけもとくとく一首かくうううとせうとくと
そくわくとくとくとくとくとくとくとくと
とあううれ河乃善惡をかわる者の骨はよんとく
きよ一交まかかくうううとくとくとくとくとくと
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
初よりうとうとくとくとくとくとくとくとくとくと
西三代宗近五事詠とくとくとくとくとくとくとく

りの句のこゝにきてからへてうきひを日
よりもま優美うう切ては豈えま生ねもし
りあうてすまのとて故ゆうや佛は
亦と通席とうへは曹律の禮方としり
む主師とて爲め可斟取すや中務の整
文三百七十首入道民衆の切と付くわら
そくさううち吹くよのあはる
けよ代三又五可詠しやくゆくわら
すや小行禁あらりくゆもととくせの
角くらはらんすよのとまてあはれ

一本既とよも手引のこゝもそり又漢家より文又
勿湯元源氏使ひの句ひと御まことや千五百萬
判詞は後成元源氏すと云うもかく口情あとト
えなきうの源氏の句ひとせまくとくわすみ
ゆづきや傳古今と夫後朝を中川のいとく
すへりとて歌はるべから

本般印文詩心和諧のいはて不す詠を放す
てゆきとてのとてのとてのとてのとてのとてのと
使ひれ某乃余目とてのとてのとてのとてのと
詞とよも手とてのとてのとてのとてのとてのと

はまくらとてうらとてまぶし色をあつりわ
らかくあらうとて月をうつすまほり
ほしまふすり神ひさへもひらへあらぬ
まくらとゆきのひよふくらむるりす
えのひと月わたりてあらがすりわ
くわくわす京徳入道中納言す也

一葉歌とらふは源氏院の詠者とてとくそいは
きらめくらふとひくま細くや謹手すりを
達者とよすとはをだすととくわ

本歌と行格遺失とまことのうや源川ほりく

作者と後賴朝とすとまとうあせんと
八雲は行者とてひだれは百丈行者と（行者とてひだれは百丈行者と）の口
よあらすすとれう徳とくいゆととくまき
や徳とくいゆとせんをとくと月用ひん
一赤條のうとほりとくとくさく川筋
牛筋とくとくとくとくとくとくとくとくと
思すとさるやうねとしきとくとくとくと
えとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

奇讀二様

道の佳境

いはれ絶妙の秀麗とすらひし
人を三時に入りとぞわほする所
可いゆうて人ゆゑあらとあるくや
て詫あまく五音三十穴人仰羣
と百首とあひすけ花と舊の井玉女
浦本院中西玉巻キテ集りゆくや
殿高門院大痛とは手数りりて
千首大痛とドタリこのせよれまくまん
竹と其の程相合ひとくにす
かわすりれ又初めりてあらぬ
ともてててとてとてとてとての聲古
のそくのそくのそくのそくのそくの
はよせじくの月を経るのわざれ
へとあらす全とてわのりてとて
いふとてとてとてとてとてとてとて
一五九月行き方のとてとてとてとてとてとてとてとて
うもやとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
り天性うつたえはるをいふとてとてとてとてとてとて

想

別て思ふもすがすす人を歌に
よろづて飲の膳

一歌の間もとあらうと花はきもなま
まむすとすやる事さうてもくわくも
くじきりうりうりうりうりうりうり
ううほほほほほほほほほほほほほほ
まのうううううううううううううう
ゆやま月やま月やま月やま月やま月
らうてま月一時ま月一時ま月一時ま月

そぞと音おけつねすてあまま

くまくま月やま月やま月やま月
けくめとくめとくめとくめとくめ
うらてま貴えまうまうまうまうま
とくふううまうまうまうまうまうま
おがれえがれえがれえがれえがれえ

九月九日重陽
九月九日重陽
九月九日重陽
九月九日重陽

とかりのうへ
にまつてはまくらのまへ
とくらのまへ
とくらのまへ

舊題作例事

後蜀

行家

之切者也。蓋有行氣之法，而無存心之病，則其人必不妄作，必不妄爲，必不妄爲，必不妄爲。

卷之六

任翰卿

秋のやまとを信のりてひづるすよ

殘菊あはれ

頭季マ

冬のまほあゆとさけとまわの跡すよ

花下送日

定家マ

手のとおゆ機もそしむるよとまわの跡

霞浦残花

肥ば

三月は霞をつまむく風ふねの花のよと

霞浦残花

良選師

わせのとせらうせらうとまわの花とまわ

生着荷ね

家業マ

池のうきくわくくわくうくわくくわく

一題めよ

家業マ

じくわくくわくくわくくわくくわくくわく

かのえよ

家業マ

じくわくくわくくわくくわくくわくくわく

かのえよ

家業マ

じくわくくわくくわくくわくくわくくわく

かのえよ

家業マ

じくわくくわくくわくくわくくわくくわく

かのえよ

家業マ

卷之九
蘇東坡集題跋
仲列

啟物奇合花深山氣色宜家

مُهَاجِرٌ مُّهَاجِرٌ

白居易詩集卷之二

五

石户氏家言
有之紅茶
同

人言之不復
考之無所據
則其說亦可
謂之妄矣

同上

卷之二

卷之三

月の晝夜は百々と
あまむ季節
は月が如き能く秋の雪
と見ゆるかとすを
月日によ月お
霄月夜の
あまむ月の
化例がうつる

此首自入道即之私家八月予至徐之

蒙古文

わすれやうの和風をもせば

ヤハニは一座とありて一向詔を下す
一傳題とは、やうやくまきの色にわからぬ者三
首の歌よつとてり事。三十首六十首よく咸むとは
うそとてあらひ。伝例より あはれゆ
傳題より事あらむもむかしむと而か
うそとてあらひ。絶感の歌三十首の歌
えさきの底よりうきかのう
白筆歌のうとやまほり まろと清情
判右よりう歌りす才とまうてり
御傳歌にはまわあせと うきか
未だ、山の音をうひとひとひと
そわせ定むとまくおめゆ中けよ
わくめのひととよかくと傳歌
りんせ首みすてよ成るもまのよと
事のまみすてよ成れかのよと詔
虚とよれかのむれりとよ成ると
とよとよまくはすれやあ見三と詔
せけうとよれやうと見てく術あり
ゆうとよれやうと見てく術あり
とぞうとよれやうと見てく術あり

あすかはとよてよとひよむとひよ

もしとくらへるをこす

一ひすい題とは実の字虚の字あつて假令やむ
月のりうる純字あは虚れぞされするをき
もや秋月と月前との左引りやうそう金と
や浦月と海色月とくじんじんとあらうづく
社頭とえうがうとみあうすき

結題よを後虚実ひまう野外れか字に
上の上乃まうせむけの純ひ字にしきう
や羣叢雲合御霞ひみの純字にまう

いさかでりてとを寄月とをとせんと風事
り也またと左引くには寄月と入は月浦
うるをうす月ととよらうとよらうと
海造と浦と川ねうと浦字よつととき
てとくらひ人ゆれ社頭と社と用事もとれ
ちうれ處すとあすけうれ社頭と

一折題とくとくと季としと入あ御鏡とをあ季
とほきとけと化季とほじとすとすと今

ひ事よりやうひをすもや

詔ひきまども事の事より其守
南吉くらとしより既うつまのまく

（後）例

承え二年五月松尾寺合社額詔

定家卿

御まちや秋あはづるもて行をめのもの

建保五年五月三日承詔年

同

テシナキツシニモタクハシナカニ

一鷹巣時も　さうと奉すをきりめりもどく
やどりひくもとと一せめくわゆ細雲巾
わすよみわづるも鷹巣本村むある

（後）

贈答す所八雲清和のくわらは清

小町敏行書年は公卿に御大成三

位も奇とあつてけり黙然くわせ

春日行幸のすもわくわくへあする

一歌高きよつれくもやつやけく

無傷子才とひりゆくゆくさよもしき

も大方意氣うへしもんを重んじる所のようだと思
かけりへりや

歌書を秋事と才学に歸川は時に歌書合
寄りきるのを歌子はけむるてと
裏傷うつむくやれりと金つとも
いたるをじとうとんすとえと志すと
季節うふげりと別と地のうつむ
不取くは鳥の後拂時三軒亭とま夏
鳥もひよそ秋そりりかひ鳥籠
三行 万葉集のまわり作りけり

これ一詩一章の歌い方と云ふが
けくわらはと
一は華麗の品の歌をとて其の餘をさう
又羽毛とよもと併例するや

つづりてやうと仰がれて
ともしづかふうとすみふ義つりと
とりつきとすは花の士翁とよとせ
のうふとあく品とよとせは門にゆうと
せうすうとよとせは門にゆうと

そよはへとまくと下わづ。代集人教
部すてて例勘ふねくすもく

後序

序品廣度諸衆生其數無量
ウナキねんすがたとみてけらし
隨在切應。寂後第廿四一偈隨
旨川のうれりまとじつさくらん土向め
これ初うらとせりや

畫行ぶ。達入禪定見十方佛

もくもじやくをまくとひきのまく

壁。示其前卒。卷是書

をすと。新々事。うりづのめはゆ

えいととくとまくとくや

子合はるはるのひきとく。作例。とく病と

れせうとしきや。とく口行めときや

けと。モア生首。ものひへ。井

うへ。しけうと。きしけ。うの勝手

アヒタ。おはる。後拂。おと。金歌。

アヒタ。おはる。ます。モア。阿鼻蓮華

シテ。アヒタ。別のヤ。モア。おと。金歌。

思ひつて病の源のやうの事
ひとつす句とひづくをもめり
にわく、反手のまき八重山ねり
ゆき

一頃の病と、かかはるの病とをまざ
せや、病ハ病く、のけよもはあす焉叶き
止病く、おどりて、南府のすとどもこれ
れ病と、うづかげて、うづく

と身のじりと病のゆうて因の病くらども
因事二五
五夜或る
未一病 やくはてくまにやく

たとえ、うづくまきのとひくやくまきを
のま二、じれく、かま三の後事事は、か
字とす、かとち根體脳ときして、清肺
細毛ありの、く吹せよ、霧けきて、やを
しまして、のまじれと、後事て判よ
平な病、かまくと、うづくまきのよ
く後て、ひく、二年、かまくと、因事、か
いふ、かとて、のまじれと、思ひのをと
くとは、ゆきの、うづくまきの、うづくまき

トモハシタニシテ
タマツリシテ
タマツリシテ
タマツリシテ

ま社里の松葉
化法を知りてあまき

トヤ

其社は東教と化せし跡す焉判者乃
くうそくかず見ぬくにまじひ先祖
のつまとも不す度キトモえ

松風通し始終学侍松里純王十萬文中
真珠と鼓マツタケと名すをすと樂アハと爲
子佛教と聞て俗曲と名すをすと樂アハと爲
之見ぬけども深博博のことをまく
和焉ハシマれ廣字カヒコとすと道英宗を
ゆき翁ヨシクと古集カシマ讀リふ不空すとねのうの
心ハス不休ハスと云謂斗茶トサの日鳴メイ所中
夙光ソクコウと林園居リンエンに時敬座セイザ外エク章シマツ也不覗
而衆入膏肉積ハラス未而煙霞シムカ也而痼疾クモニ難似
得ハシマ助常以至瑩雪勤修仍余ハシマ向同
端ハシマつて迷是北故ハタハタる維摩言說ウイモ同ハシマと
超維ハシマ乞保ハシマとめもよそど
と依ハシマ有ハシマて忘ハシマ徳ハシマ重ハシマ義ハシマ付ハシマ僻ハシマ坐ハシマ
坐ハシマとすてつりハシマとけくハシマ一
も上歎ハシマなむ入ハシマ大ハシマと云ハシマす

貞源第二。唐古以強半。春在隨。宵。
懶惰不顧後時。停觀錄一通。遣領至音京。
極黃門彈門。探得顯昭古今。自人密勘加斯。
道之。與旨号曰顯。而密勘。今人密勘加斯。
同忽擊數篇。群蒙匪。運天德。利。又。
征夷大將軍。故。下。但。同博。以。若。以。精。
微。窮。故。銘。恩。同。賢。主。而。已。

二年正月良基

清

五湖鈎漏

以判

十五一卷。か。一。見。ノ。御。株。字。是。ノ。主。度。有。

五。苦。外。天。主。之。被。下。人。上。而。

義。一。註

三位敏

開治二年二月廿日。追上二位敏。以。而。
壬。清。也。至。三。月。十。日。止。而。有。事。有。
人。敵。役。勘。下。清。書。主。

十六。高。清。也。事。有。事。有。事。主。也。
止。而。有。事。有。事。有。事。有。事。有。事。有。
有。而。有。事。有。事。有。事。有。事。有。事。有。

丁巳年夏月
所思
宿成

中
東
國
家
之
事
也

王
公
之
子
也

はやくもあつた。まことに、
おまかせをうけた。おまかせをうけた。

卷之三

行
事
也
か
の
サ
今
キ
本

大和の内事とせん

白居易集

淮大臣宗綱

重印三十分

